

令和4年度秋田県総合政策審議会第1回教育・人づくり部会議事録

- 1 日 時 令和4年5月24日（火）午後3時半～5時
- 2 場 所 県庁第二庁舎7F 教育委員室
- 3 出席者
 - 委員 佐藤 学（秋田大学大学院教育学研究科教授）
豊田 哲也（国際教養大学中嶋記念図書館長・教授）
野崎 一（秋田県PTA連合会事務局長）
廣田 千明（秋田県立大学システム科学技術学部准教授）
 - 県 和田 渉（秋田県教育庁教育次長） ほか関係課室長等

1 開 会

2 あいさつ

●和田教育次長

本日は、大変お忙しい中御出席いただき、感謝申し上げます。また、皆様には、この度、委員就任を快くお引き受けいただき、重ねて御礼申し上げます。

昨年度、当部会で御検討いただいた新秋田元気創造プランが、4月からスタートした。新プランでは、人口減少の克服を最重要課題に位置づけ、六つの重点戦略に基づく施策を推進することとしている。その戦略の一つである戦略6「教育・人づくり戦略」では、これまで積み重ねてきた実践をベースに、オンラインやICTなど、新たなツールを活用しながら、新たな時代に対応した学びの実現に向けて取組を始めているところである。

今年度の取組については、この後、議事の中で説明するが、委員の皆様には、それぞれのお立場から、「このような取組を行ってはどうか」といったアイデアや、現在の取組に対する改善点、あるいは「この取組は今後も継続すべき」といったアドバイスなど、忌憚のない御意見を頂きたい。私どもとしては、頂いた御意見を来年度の事業立案に生かしていきたいと考えている。

提言書の作成に向け、本日の会議を含めて3回の会議を予定している。限られた時間の会議であるが、有意義な会となることを期待している。本日は、よろしく願います。

3 部会委員の紹介

出席者名簿に基づき委員を紹介した。

4 部会長選出

委員互選により豊田委員が部会長に選出された。

5 部会長代理指名

部会長となった豊田委員により佐藤委員が部会長代理に指名された。

6 部会長あいさつ

◎豊田部会長

前回、人づくり部会に関わったが、コロナ禍により不幸中の幸いでICTの導入が加速化し、教育におけるICTの活用という大きなコンテクストの中で、秋田県の教育がどれ程頑張っていけるのかが大きな課題となっている。

これまで秋田県の教育は、他の都道府県の先を走ってきたが、これから更に先に行き続け、県民の教育に寄与し続けることができるかどうか、大きな局面に差しかかっているところである。

我々は専門家として横から御意見を申し上げる立場であるが、本県の教育行政が大きな飛躍を遂げられるよう、部会長としてできる限りの貢献をさせていただきたい。

7 議 事

◎豊田部会長

次第に沿って進める前に一言申し上げる。審議内容は、議事録としてHPに公開する予定であり、その際に委員名は秘匿する必要はないものと考えているが、よろしいか。

それでは、議事に入る前に、昨年度から委員の交代があったので、自己紹介ということで、それぞれどのようなお立場から教育に携わって、どのようなお仕事をされてきたのかを名簿順にお話いただければと思う。佐藤委員から願います。

○佐藤委員

佐藤学である。秋田大学大学院教育学研究科から参った。いわゆる教職大学院であるが、設置に当たっては、秋田県教育委員会といろいろと御相談をして、何とか作ることができた。そこに関わったこともあって、今年度より籍が配置換えとなっている。

専門は、算数・数学の教科教育学であり、2年前から秋田県検証改善委員会でお世話になっている。今も教職大学院では、現職の院生の方、実務家の先生方、秋田県総合教育センターの研修員の方々との交流、それから附属小・中学校とも人事交流をさせていただいて、非常に御支援を頂いている。

これまで狭い分野で活動を行ってきており、このような大きな会を務める器ではないが、豊田部会長のお話にもあったとおり、より一層、秋田の学力向上に向けて、全国をリードし

ていけるよう、微力ながら務めてまいりたい。よろしくお願いします。

◎豊田部会長

私は、2007年から国際教養大学でお世話になっている。昨年度までのこの部会では、授業を全て英語で行い、留学生も多い国際教養大学での経験を踏まえ、本県の初等中等教育においていかにして国際化を進めることができるのか、という観点から意見を述べてきた。しかし、国際的に活躍できる人材の育成のためには、英語力の涵養に加え、ICT技術への対応も大切である。ICT技術を使いこなせなければ即戦力として活躍することができないからである。

ICT技術は教育効果も大きい。コロナ禍の2年間でそのことを実感した。国際教養大学では既に原則として授業を対面で行うようになっているが、コロナ禍中の経験を踏まえて、人数が多い授業については引き続きオンラインで行うことにしている。高い教育効果を期待してのことである。例えば、今日の会議の直前には約100人の学生の参加する授業があったが、Zoomのブレイクアウトルーム機能を使って学生を25個のディスカッション・グループに分け、Googleのスプレッドシート機能を使ってグループ作業を監督しながら授業を進めるものであった。対面の授業でもパソコンを持ってきてもらい、学生たちにGoogleドキュメントなどを共有させながら作業してもらっている。ICT技術を活用することで、教育にどのような可能性が広がってくるのかといった点から意見を述べていきたい。

○野崎委員

野崎一である。秋田県PTA連合会の事務局長を務めている。保護者の方々と話をし、情報を吸い上げながら、教育委員会の皆様と足並みを揃えて活動している。

総合政策審議会の総会で必ず話題になるのが、人材の育成・確保、ICT化であり、そうした意味でも、当部会は非常に重要な会であると感じている。微力ながら皆様のお力になればと考えている。よろしくお願いします。

○廣田委員

秋田県立大学の廣田千明である。システム科学技術学部にも所属しており、本荘キャンパスから参った。

学科は情報工学科に所属しているが、元々は数学科の出身で、専門は数値解析である。教育に強い興味があり、この数年、プログラミング教育がホットなトピックであり、その部分であれば秋田県に貢献できるのではないかと活動を行ってきた。

ICTの活用や教育のDXが今後どのように変わっていくのかについて非常に興味があり、皆さんと一緒に考えて、何かできれば良いのではないかと考えている。少しでも貢献できるものがあれば嬉しく感じる。よろしくお願いします。

◎豊田部会長

それでは議事に入る。議事（１）今年度の教育・人づくり部会の進め方について、事務局から説明をお願いします。

●伊藤副主幹

部会資料－１を御覧いただきたい。今年度の部会は計３回を予定しており、９月末の第２回総合政策審議会への提言の提出に向けて、意見交換していただく。第１回は、本日の会議であるが、今年度の新プラン戦略６の取組について説明を行い、理解を深めていただく時間としたい。第２回は７月１日に予定しており、本日の会議の論点整理を行いながら、提言に向けた意見交換を行っていただく。その後、７月下旬から８月上旬に予定している企画部会で部会間の意見調整を行い、８月に予定している第３回部会で提言案を検討していただく。その後、メール等でやりとりをしながら、９月末の提出に向けて提言を仕上げていくという流れになる。

◎豊田部会長

ただ今の説明について、御意見・御質問はあるか。

次に、議事（２）今年度の新プラン戦略６の取組状況について、事務局から説明をお願いします。

●元野教育庁総務課長

部会資料－２と３に基づき、令和４年度の取組状況について説明する。

はじめに部会資料－２を御覧いただきたい。戦略６の全体の構成について説明する。

戦略６は、資料記載のとおり、目指す姿１から６まで、６本の項立てになっている。

目指す姿１は「秋田の将来を支える高い志にあふれる人材の育成」で、キャリア教育や、デジタル教育を含む専門教育を内容としている。

目指す姿２は「確かな学力の育成」で、秋田の探究型授業や特別支援教育を進めていくこととしている。ここでは、手段としてＩＣＴの活用に力点を置いているところである。

目指す姿３は「グローバル社会で活躍できる人材の育成」で、英語教育や多様な国際教育を推進することとしている。

目指す姿４は「豊かな心と健やかな体の育成」で、心を育む教育や相談体制の充実、体育活動や健康教育の推進を内容としている。

目指す姿５は「高等教育機関の機能の強化」で、公立大学法人への支援などを内容としている。

最後に、目指す姿６は生涯学習や文化芸術、文化遺産の保存・活用を内容としている。

次に、部会資料－３に基づき、内容を説明していく。目指す姿ごとにまとめているが、ポイントを絞って説明する。

はじめに1ページ、目指す姿1「秋田の将来を支える高い志にあふれる人材の育成」である。1「秋田を支える人づくり教育推進事業」について、「(新)」と記載しているのは、本年度の新規事業ということである。また、右側に白抜き「概要 P30～32」と記載しているのは、お配りしている「教育委員会施策の概要」というピンクの冊子の該当ページになっているので、後ほど御覧いただきたい。

1「(新) 秋田を支える人づくり教育推進事業」であるが、将来の秋田を支える人づくりのために、高校生の学びを総合的に支援するという事業であり、①では地域人材や社会人講師を活用したキャリア教育の充実、②ではインターンシップの推進、③では成長産業に関連する技術指導などを行っていくこととしている。

次に、3「(新) デジタル教育 未来へRUNプロジェクト」である。こちらは高校を対象とした事業であるが、これからのデジタル社会で活躍するために必要となる論理的思考力、提案力、課題解決能力等を身に付けるために行う事業であり、①では、実習教材を活用したプログラミング教育の実施、2ページに移って、②では、普通高校におけるデジタル人材の育成ということで、普通科のある高校にデジタル探究コースを新設する。③では、専門高校におけるデジタル人材の育成ということで、学科・学校間連携や外部人材の活用など、より高度な教育を進めていく。

3ページ、目指す姿2「確かな学力の育成」についてである。

1「ICTを活用した秋田の教育力向上事業」は、小・中学校における事業であり、ICTを活用した学習活動の充実について市町村を支援していくものである。先進校の授業やモデル校による実践事例の紹介なども取り入れていく。

5「わか杉っ子！育ちと学び支援事業」では、幼児教育の質的向上を図るため、次のページに移って、教育・保育アドバイザーの配置、国で今年度スタートした「幼児教育スタートプラン」に合わせて、幼児期の教育と小学校教育との円滑な接続の推進などを進める事業である。

5ページ、12「(新) 統合型校務支援システム導入等推進事業」についてである。県立学校に、学籍、教務、保健等の業務を効率化する共通の校務処理システムを導入し、教育の質の向上や教員の働き方改革を進めようとするものである。今年度にシステム構築を行い、来年度からの本格稼働を予定している。

6ページ、目指す姿3「グローバル社会で活躍できる人材の育成」についてである。

1「AKITA英語コミュニケーション能力強化事業」では、小中高一貫した英語教育の推進により英語コミュニケーション能力の強化を図ろうとするものであり、①では、外国語指導助手の配置や、中学校2年生から高校3年生までに英検I B Aを全員に受けさせるもの、③では、小学校5年生から高校3年生までを対象としたイングリッシュキャンプの実施などを内容とするものである。

8ページ、目指す姿4「豊かな心と健やかな体の育成」についてである。

1「生徒指導総合支援事業」、2「高校生学校生活支援事業」では、学校での相談体制の

充実を図るため、スクールカウンセラー、広域カウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどを配置する事業である。

4 「(新)“あい”で見守る！あんしんネット構築事業」では、インターネット上のトラブルから子どもたちを守るため、健全利用に向けた支援体制を整備するものであり、ここで「あい」とは、愛情の愛、目のEYE、そしてA Iの三つを掛け合わせた言葉である。ネットパトロールでは、A Iを活用することとしている。

9 ページ、6 「運動部活動活力アップ支援事業」は、部活動指導員の配置について市町村を支援していくもの、選手の競技力の向上や指導者の資質向上の支援を行うことを内容としている。

10 ページ、目指す姿5 「地域社会の活性化と産業振興に資する高等教育機関の機能の強化」についてである。

3と4では、秋田県立大学・国際教養大学の運営費の助成を行うほか、7 「秋田県立大学アグリノベーション教育研究センター事業」では、「秋田版スマート農業モデル」を創出するための研究や人材育成に対して助成を行うものである。

12 ページ、目指す姿6 「生涯にわたり学び続けられる環境の構築」についてである。

1 「(新)「楽しく読書！」県民運動推進事業」は、県民を対象として、読書意欲を喚起するための啓発イベントを行うもの、2 「つながり、広げる子どもの読書応援事業」は、子どもを対象として、読書習慣の形成を図るため、ビブリオバトルの開催や読み聞かせボランティアの養成を行うものである。

最後に6 「(新)「未来につなぐ」OMON」世界遺産魅力アップ事業」では、昨年度、世界遺産に登録された大湯環状列石・伊勢堂岱遺跡について、諸課題を整理するほか、世界遺産としての知名度向上を目的とした事業であり、気球を活用した見学会や大湯環状列石の中を走る県道の移設に向けた概略設計などを行うものである。

説明は以上である。

◎豊田部会長

それでは、意見交換に移りたい。事務局から説明のあった事項について、御意見・御質問を頂きたい。目指す姿が六つあるので、二つずつに区切りながら議論を進めたい。

まずは、目指す姿1と2の取組について、御意見・御質問をお願いします。

なお、今年度、3回の会議を予定しており、7月の第2回で提言に向けた意見交換を行うこととしているが、第2回で提言の方向性を決めなければならない。アイディア出しは本日举行することとなるので、気が付いたことがあれば、遠慮なくどんどん発言してほしい。

○佐藤委員

算数・数学の目標に50年ぶりに復活した「統合的・発展的考察」のうち、特に「発展的」という部分について、ここ7年程研究している。

先日、学力・学習状況調査のデータを見ていたら、気になることがあった。もちろん、資料に御提示いただいているとおり、全国平均から見ると、秋田県の平均点が高いことは事実である。しかしながら、全国と秋田県の中央値があまり変わらず、差があっても1点程度である。それが気になって、平成19年から平成30年まで（※平成31年度からA問題・B問題が統合されたため）、全国と秋田県が何問正解したのかを見ていったときに、年によって問題の作りが違うので一概に言えないが、気になるのは上位層が伸びていないということである。全国の間層の子どもたちが厚くなっており、秋田も中間層が厚くなっているが、依然として上位層が伸びていない。秋田の授業を改善する視点がまだまだあることを示唆しているが、これをデジタルでやっていくということは、私の中ではつながる点がある。

算数の授業を見ていると、子どもたちが自分の言ったことのない考えを出す子どもたちのアイデアをホワイトボードに見せられて、先生は板書していくつかの計算を示す光景が見られる。本来は、子どもが自分で弾き出して、「本当だ。この人の言うとおりになっているんだ。」と、決まりを見つけ出しにいかなければならないのだが、当の本人たちはじっと見ているだけであった。これでは、いくら機械が入っても、先生の「やりなさい」を聞くだけの授業にしかならない。デジタルが入ることをきっかけに、先生が言ったことを、学生が勝手に調べ出すということが起こることを期待する。やはり、考える道具にならなければいけない。義務教育課も高校教育課も考えていると思うが、主体的に考えていく点を考える必要があるということをおききたい。

◎豊田部会長

デジタルなデバイスが入ってくると、物理的な黒板やホワイトボードに比べて、生徒の主体的・能動性の尊重がやりやすくなる。また、教師の目が学生の手元に届くようになるので、100人の授業を行っていても、Google ドキュメントやスプレッドシートなどを使って、学生に書き込ませて、書き込んでいる様子を横から見て、書き込みが遅いようであれば聞きに行く、ということが、大人数の場合、伝統的な授業よりも対応できるようになる。まして、1クラスの人数が20~30人であれば、物理的に一人ひとりの手元を見るのは難しいが、一人ひとりのデバイスに書き込んでもらえれば、スクリーンショットを撮ることも可能であるし、リアルタイムに見に行くことも十分に可能である。ICTによって開かれた新たな可能性を、佐藤委員から御指摘いただいたとおり、活用していただきたい。

◎豊田部会長

ところで、生徒たちに配られる端末のメモリやCPUの性能はどうなっているのか。また、教師が使うPCの性能はどうか。

●稲畑義務教育課長

御承知のとおり、令和3年度までに、各学校の児童生徒ほぼ1人に1台、タブレット端末

が配備された。国がG I G Aスクール構想に基づき、全国で進めている取組であり、国の予算で購入した。ただし、契約は市町村ごとに行っているため、どのようなスペックの端末を購入したかについて、手元に資料がない。ただ、概して申し上げると、授業中に端末がフリーズして動かないとか、入れるべきものが入れないとか、動作に時間が掛かって、生徒の待ち時間が長いとか、そのようなことはないようなスペックの端末を導入していただいている。

◎豊田部会長

教員側の端末のスペックはどうか。

●稲畑義務教育課長

教員側も生徒の端末と連動して動かすことが前提であるので、同様のスペックの端末を用意している。

◎豊田部会長

教員の側で使用するPCについては十分な性能のものを用意する必要がある。特にオンライン授業を行おうとすれば高いグラフィックの性能が求められる。私自身、この2年間、オンライン授業で苦しめられた。当初は学生のパソコンと同程度の性能のものがあれば良いと思っていたが、それでは最低限の授業は行えても、良い授業を行うのは難しい。いろいろと試したが、大学の授業ならRyzen9かCorei9くらいが必要になる。教師の側では授業中の様々な協働作業のハブ的な役割を担うことになるからである。生徒側の端末がフリーズしてしまうのはしょうがないが、教師の側でPCがフリーズするのは論外であるし、音声の質がちょっと下がったりすれば、それだけで授業のクオリティに影響する。県内の小中学校・高等学校においては、これまでも十分に考慮して対応されてきたと思うが、ICTの活用を進めていくに当たり、教師側の端末が生徒側の端末と同じ性能のものでは不十分であるということをしかりと認識して、小中学校については市町村の取り組みを支援し、県立高校については県としてしかり教員を支援していただきたい。

○廣田委員

教育委員会の仕事として、子どもたちの教育も大事であるが、先生たちの能力や可能性を引き出していくことも大事で、環境を整えば先生たちが活躍して良い教育をしてくれると思っている。そうすると端末も生徒と同じでは都合が悪いときもあるし、環境を整えて、先生たちのやる気を引き出していくことも重要である。

これからは探究的な学習が重要になる。大学は、研究という探究を行っているところであるが、探究ができるのは、研究費という自由になるお金があるからである。研究であるから無駄になることもあるが、試してみたいことがあれば、自由に使えるお金があって実行でき

る。先生個人にお金を付けるということはないと思うので、学校単位で予算が付いているのかもしれないが、新しい探究の授業をやりたいのでお金を使いたい場合に、それをケアする手段があれば良いと思う。なかなか難しいことかもしれないが、少額でも自分で動かせるお金があって、新しいことにチャレンジできて、そこから良いものが生まれて、全県に広がっていくといった形になれば良いと思う。

◎豊田部会長

従来も「教材開発費」として、学校ごとに予算を取っていると思う。ICTを使った教育という大改革の移行期であるので、ICT教材開発費が必要になってくると思うが、どのように対応されているか。

●和田教育次長

県も市町村も、いろいろなことに取り組みたい、質の良い授業を行いたい、という思いは同じである。そのためにはお金が掛かるが、与えられたものの中で試行錯誤しているというのが現実である。今後は、実証事業を行う中で、「子どもたちにこういう教材を提供したい」、「プレゼンをするためにはこういうものが必要だ」などといった教員の意見を聴取しながら予算の確保に努めてまいりたい。

◎豊田部会長

移行期であるので、教材開発費が今まで以上に必要である。ただでさえ一人ひとりの教員に負担が掛かっている状況で、加重的な負担を掛ける訳にはいかない。予算面での手当をしっかりとお願したい。

●元野教育庁総務課長

補足であるが、教材費については、部会資料－3の1ページの3に記載しているが、Edtech教材ということで、開発済みの教材を選定しながら教育現場に広げていく予定である。個々の教員が教材を開発するのではなく、出来合いのものを活用するということを考えながら進めていきたい。

○佐藤委員

それについては、二つの流れがある。

一つは、良い知見があるのだから、それを使うというのは大事であるので、どんどん進めていただきたい。

もう一つは、面白く使っていただかないと広がらない。秋田の先生方の中で、そういったことが好きな方々が集まって、こんな使い方だってできるんだよといったように、インフォーマルなものが広がると、先生方も面白がって、使ってみたいというふうになると思う。先

生たちよりも子どもたちの方が得意で、私たちも研究で Slack を使って会議を行っているが、これを教えてくれたのは高校生である。企業が開発したきちんとしたソフトももちろん良いが、教育委員会で先進的な事例を集めて、うまく発信していくことが大事だと思う。

●和田教育次長

最近若手が伸びている。そうした情報を事務所・出張所が集めて、オンラインミーティングで発信しており、「わか杉学びネット」で公開している。是非御覧いただきたい。

また、指導主事が授業に参加し、教員がICTを有効に活用している事例を収集している。それをリストアップして公開し、みんなで教育していくということで、ホップ・ステップ・ジャンプで進めている。頂いた御意見も踏まえながら進めていきたい。

○廣田委員

「デジタル教育 未来へRUNプロジェクト」について、②の普通高校におけるデジタル人材の育成とは、どのようなことを行うのか。

●佐藤高校教育課長

普通科のある高校に、試験的に「デジタル探究コース」を設置することとしており、今年度は、4校を指定する予定である。高校のカリキュラムに「総合的な探究の時間」というものがあるが、先に、Googleと自治体パートナーシップ協定を締結しており、同社からの支援を頂きながら、デジタルに興味を持つ生徒を対象として、情報リテラシー教育やコンピュータサイエンスに関する学習支援、エンジニアとオンラインセッション、IT分野の著名人による講話、県内IT関係企業などの外部人材を活用してデジタル教育を進めることを考えている。

なお、次年度からは更に5校を追加し、県北・県央・県南、それぞれの地域で、デジタル教育を普及させていきたい。

○廣田委員

私は情報工学科なので、特に関連があると思っているのであるが、デジタル探究コースで高校生がいろいろと探究してきたものが、情報工学科の場合、そのままつながってくると思われる。全体的に広がっていくということで、私共としては大変期待している。

○佐藤委員

どのようにデジタル技術が使われているのかを知るには、やはり現場に行くのが一番大事ではないか。短期間で構わないので、インターンを行うことはできないか。

◎豊田部会長

ICT教育と職業教育との関連付けについては、インターンシップ、キャリアガイダンスなどがあると思われる。インターンシップが物理的に難しくても、オンラインを活用して、実際のICTの使われ方について、リアルタイムに専門家の意見を聴く機会を持てるということは、子どもたちにとって大いに刺激になると思われるので、キャリア教育の一環としても是非御検討いただきたい。

○廣田委員

目指す姿2の12「統合型校務支援システム」とはどういったものになるのか。

●元野教育庁総務課長

教員がこれまで、学籍や教務、保健等のデータをExcel等でそれぞれ自分のPCで管理していたものを、システムで管理することにより、入力効率化を図ったり、ビッグデータとして分析したり、ということが可能になるものである。

全国的には導入が進んでおり、都道府県で未導入が本県のみという状況であった。令和5年度からの本格稼働を目指している。効果としては、教育の質の向上ももちろんであるが、教員の働き方改革に資するものであり、これまで手作業でやっていたものを自動化することにより、文科省の資料では、教員1人当たり年間で80時間から200時間の業務削減効果が見込めるとされている。

○廣田委員

小学校でICTを推進するための研修に呼ばれることがあるが、先生たちにとって授業でICTを使うというのはものすごくハードルが高くて、すぐには手を出したくないと思っているようである。一方、校務の情報化は、日々の仕事が楽になるというメリットがあり、利用を推進しやすい。普段からPCを使って慣れていただくことが大事である。小学校での研修でも、校務の情報化が進むと授業でのICTの活用も進むということをいつも話してきているので、統合型校務支援システムの導入は良い取組だと感じた。

◎豊田部会長

目指す姿3と4について、御意見・御質問はあるか。

◎豊田部会長

目指す姿3の1「AKITA英語コミュニケーション能力強化事業」の④AKITAグローバルネットワーク事業に「交流会の実施」とある。県内の小・中学校で合同で行ったらどうかということをこれまでも申し上げてきたが、この「交流会」とはどういうものか。

●佐藤高校教育課長

高校で、ネットワーク指定校として4校を指定し、各校で行った課題研究や国際交流活動で得られた成果を共有する。それから、日本や郷土の課題と世界の課題を多角的・多面的に考察して、課題解決できるグローバル人材を育成するため、この4校でオンラインによる研究発表の交流会を開いたり、ポスター発表を行ったりするものである。

◎豊田部会長

中学校では小規模な学校が多く、子どもたちの世界はどうしても小さくなってしまいうので、自分の発表について、他の中学校の先生や生徒から指摘をもらうと、大きな刺激になる。ICTを活用した学校間交流を進めていただきたい。

○野崎委員

目指す姿4の1に関連して、学校に馴染めなくて、他の小規模校に転校して、そこで生き生きとして通っている子どももいるという話を聞く。学校の統廃合が進む中で、そのような、様々な課題を抱えて、いろいろな地域から子どもたちが通っている小さな学校が、大きな学校に統合されるケースもあると思われる。そのような場合の子どもへの対応について、何か考えているか。

●和田教育次長

市町村立の小・中学校において、学校に行きづらく、家庭で過ごしている子どもへのケアについては、公的なものとして適用指導教室がある。また、野崎委員のおっしゃるとおり、区域外就学は限られているので、子どもたちが環境を変えたいということが出てくるかもしれない。その場合、国では特例校などの制度も設けているので、これからそのようなことも考えていくことになると思われる。

○野崎委員

小さい学校というのも必要だと思うが、これからは統合していく流れだと思う。そのような子どもたちの救済も、また、人づくりである。その子たちは、特殊なのではなく、環境を変えれば様々な可能性がある。そのような子どもたちを摘み取らず、環境を整えてあげられればと思う。

○廣田委員

コメントであるが、目指す姿4の4の取組は非常に重要であると思う。学校でのICT活用の妨げになっているのが、親がICT機器を遊びの道具だと思っていて、子どもたちがPCを使って勉強していても、遊んでいると思ってしまう節があるようである。そうではなく、勉強の道具として使っているということを理解してもらう必要がある。家でICT機器を使ってもらうためには、親が安全だと思ってもらわなければならない。特に親世代のICT

に関する考え方、安全性に対する教育がなければならないので、ここにきちんとお金が付いているのは非常に良いことだと思った。

◎豊田部会長

教育にICTを取り入れなければならないとなったときに、私も子どもをオーストラリアに行かせたが、「蜘蛛」について調べてパワーポイントでスライドを作るといったことを、小学校3年生くらいからすでに始めていた。秋田はスマホの普及率も全国で低位にあり、インターネットに関する親世代の取組が遅れている中で、親世代のICTに対する意識の低さが、子どもの教育の質の低さにつながりかねないという懸念がある。直接的には何もできないが、危機感を持って取り組んでいただきたい。

○野崎委員 今のお話をそのまま現状報告することになってしまうが、PTAでもデジタル化を進めており、会員に会報を送る際に、Google フォームを使って編集してくださいとしているが、約8割は、FAXか郵送で返ってくる。さらに、紙で返ってくるうちの1割・2割の方からは、「メールアドレスを教えなければ駄目ですか」と言われることがあり、本当に今の親世代は意識が低いと感じる。インターネットセキュリティについては、PTAも一緒に取り組んでおり、「親が知らない子どもにも教えられないよ」と発信をしているが、どうしても1回聴いてしまうと、聴いたことになってしまっていて、次がない。時代はどんどん進歩しているのに追いついていない。でも、子どもはそれを使わないといけない。親への理解啓発については、私共もお金を使ってやっていかなければならないと感じている。

◎豊田部会長

現場での御経験からの御意見を頂き、感謝申し上げます。

○佐藤委員

目指す姿4の5「秋田っ子元気アップ推進事業」の①体育に関する指導サポート事業と、6「運動部活動活力アップ支援事業」について、他県から来た者として、文武両道というものを、言葉だけでなく、本当に実践していることに非常に驚いた。私の出身地では、勉強する人、運動する人、何もしない人の3層に分かれていて、秋田は本当に文武両道だと感じた。県大会や市の大会、近場の大会でも、何度も敗者復活があって、諦めない心も育てている。これが秋田の県民性を作っているのだと勝手に解釈している。そういった意味で、こうした取組に力を入れていくのは非常に賛成であるが、一方、働き方改革で、中学校・高校の先生の部活動指導が負担になっているということも聞いているので、その辺りをどう考慮されていくのか、御説明いただきたい。

●寺田保健体育課長

今のお話は、中学校における運動部活動の地域移行に関するものと思われる。報道等でも、令和5年度から、学校単位でないチームの参加も認める方向となっており、詳細については、今後示される予定である。この事業は、教員の働き方改革と、少子化に伴って持続可能な部活動、子どもたちのニーズに合った部活動を継続する、という二つの面がある。令和3年度から国の事業でモデル的に地域移行に関する取組を全ての都道府県で行っている。本県でも、昨年度、羽後町と能代市をモデルとして、地域に土日の部活動を運営していただいた。今年度は、羽後町と大館市でモデル事業を実施している。

この5月中に、スポーツ庁及び中体連で、これまで検討してきた提言を示す予定である。参加資格の問題、どのように移行させていくのかについての具体的な提言が示される予定である。本県では、昨年度末、県単独でモデル事業の報告会を実施した。全ての市町村に案内し、2市町の成果と課題を知っていただき、移行に向けた意識付け・動機付けを進めているところである。具体は今後見えてくると思うが、共通の課題は、人材の確保、そして、どの団体を主体として進めていくのかであり、もちろん、予算の問題もある。県としては、関係部署と連携を図りながら、実施主体である市町村に丸投げするのではなく、県として支援できることはないのか検討している。

○佐藤委員

子どもたちのニーズを大切にしていくというお話に関心を持った。例えば、隣の岩手県では大谷選手をはじめ、メジャー選手が3人も出ていて、野球好きの秋田県人としても気になるところだと思う。私もこちらに来て10年くらいになるが、金農旋風には大変熱くなり、寄付もさせていただいた。私も古い人間なので、野球を応援したいし、学校をあげて応援しにいくというのは当たり前感覚であるが、こうしたものは見直していかなければならないのではないかと感じる。いろいろなスポーツに、それぞれいろいろな面白さがあり、先の東京オリンピックでは、街中で勝手に遊んでいて叱られていたような競技で、子どもたちが大技を決めて盛り上げるといった新しいスポーツも出てきた。もちろん、これを秋田でもという訳ではないが、秋田の強みを生かしたスポーツ、バドミントンやバスケットでは強豪チームがある。どのスポーツを優遇して、どのスポーツを冷遇するということを決めることはできないが、子どもたちが好きなスポーツに向かっていく心を育てていくことが大切である。

◎豊田部会長

次に、目指す姿5と6について、御意見・御質問をお願いします。

○廣田委員

目指す姿6の読書の取組について、とても重要だと感じている。数学の問題を解かせてもできない子どもたちが、数学が分からないのかと思いきや、国語が分からないのではないかと

と思うことがある。答えなければならないことに答えていない場合も多い。また、全然違う計算をしていて、答えが合わないという場合もある。そういった状況を見て、国語力が落ちていると感じる。日本語の文章も、英語が苦手な人の理解と同じで、単語の意味は分かるから、単語の意味をつなげて文章を理解している子どもたちがいることを心配している。そういった意味で、こうした読書の取組は大切であり、個人的には、今後も継続して取り組んでいただきたい。

また、トークライブなどもあって、楽しそうで是非とも参加してみたいと思うのであるが、現状は秋田市までいかないと思う。例えば、いろいろな小学校に中継して、秋田市まで来なくても参加できるとなると、もっと参加者が増えてよいと思う。出演者の希望などもあり、難しいところがあるのかもしれないが、動画をアーカイブで観ることができるとか、一人でも多くの方がイベントに参加して、読書の楽しさを知っていただきたいと思う。

○野崎委員

同感である。読み聞かせでは、読んでいる人の感情を声の抑揚で示してくれるので、自分の中に入って来るものがある。テレビを観ていると映像が伝えてくれるので、楽に情報が得られる。それはそれで良いのであるが、本を読んでもその内容を映像化できない、映画監督になれない部分が大きくて、文字の羅列にしか見えないので、本から離れてしまうことがある。そういった意味で、廣田委員のおっしゃるように、読解力が足りなくなっている。こうした取組を進めていただいて、子どもたちに啓発していただきたい。

○佐藤委員

目指す姿5の高等教育機関の機能強化に関して、国立大学法人である秋田大学に対して、どうあって欲しいのか、県からメッセージを出してほしいと思う。我々も目指す部分があるが、ともすれば、秋田を見えていないという場合もあるかと思う。秋田大学に期待する部分を言っていたきたい。そういう意味では、次年度以降、学部長を呼んで懇話会を開くなど、もっと距離を縮めていただき、秋田県にある大学なのだということを届けていただきたい。

◎豊田部会長

最後に、全体を通して御意見・御質問はないか。

○野崎委員

目指す姿2の1の「先進校の授業のストリーミング配信」について、具体的にどの学校で、どのような配信の仕方をするのか。

●稲畑義務教育課長

教育委員会施策の概要の P27 を御覧いただきたい。右下の「オンラインミーティング」というのがこれに当たるものであるが、ICTを活用した授業改善事業として、県内の小学校3校、中学校3校を推進校として指定して支援しているが、この6校のうちの何校かから授業を配信することを想定している。

○野崎委員

秋田県の学校か。

●稲畑義務教育課長

授業は県内の学校であるが、配信は全国に対して行う。

◎豊田部会長

国際教養大学の授業には、高校生でも英語が分かれば内容を理解できるものもあるので、高校生にオンラインで参加していただく機会を設ければ、大学に興味を持っていただけると思う。もちろん、秋田大学、県立大学、公立美大も同様であるが、大学の授業の一部を配信して、高大連携の一環として、高校生に参加していただく機会を設けていただくと良いと思うので、将来の課題として御検討いただきたい。

(ここで、映像が一部写らなくなる)

◎豊田部会長

恐らく、長時間の会議で県のノートPCが過熱してきた影響であると思う。音声はつながっているのですが、このまま続けたい。

ところで、大人同士の会議であれば、画面がフリーズしても、音声のクオリティが多少低くなっても大丈夫であるが、子ども相手には最高のパフォーマンスで提供しないと、たちまち集中力が途切れてしまうので、ハブとなるパソコンの性能が重要である。普段からオンライン授業を行っていないとなかなか気付かないと思うが、教師の側のPCの性能は授業の質に大きく影響する。ここで予算をケチってはいけないということを重ねて強調しておきたい。

○廣田委員

これから教育データの利活用が進んでいくと思うが、地域によってどんどん活用するところと、全然進まないところの差が出てくることを気にしている。様々なところで講演を聴くが、どういうデータを採って、どう活用するかは固まっていないと思う。ただし、データは今から採っていないと、いざ使って何かやろうと思ったときにデータがないとAIも機能しない。そこからデータを採り始めても、何年も遅れてしまう。学習データの収集をどん

どん進めてほしい。文科省でも MEXCBT という CBT によるデータ収集の方法を示している。積極的にデータを採っておくことが大事だと思うので、進めてほしい。

○佐藤委員

データを採ることはお金が掛かるが、今、子どもたちの採点は記述式でも AI で採点できるようになった。ということは、子どもたちの解法はある程度パターン化されているということである。更に言うと、学生たちは入試の段階で分かっている、解答パターンを学習して、それに当てはまるかどうかを書いてきたということである。ひょっとすると、先生方の指導も、AI で解析するとパターンが見えてくるかもしれない。AI に先生をやらせようという訳でなく、教師文化が変わっていきこうとしている中で、その継承はかなり難しいと思う。ベテランの先生が継承しようとする場合の問題意識が、受け取る若手が分からなければ、ずっと同じ場面を見ていても働かない。これは認知科学でも分かっている。自分の価値や信念が合って初めて同じものを見ようとするので、50代の先生方が技術は凄いということは分かるが、具体的に何を捉えて、どういう知識を使って、どういう技術を使っているのかということは、結局、今の20代の先生方に模索してもらわないといけない。秋田県と他県との違いは、恐らく昭和の授業を残してくれていたからだと思う。そうした良いものがあるので、秋田の教師文化・技術を残すためのデータ分析をしてほしいと思っている。一緒に研究できるのであれば、是非お願いしたい。

◎豊田部会長

議論は尽きないところであるが、時間となったので、審議はここまでとしたい。

最後に改めて申し上げたいが、秋田県が Google for Education を導入したのは画期的であり、素晴らしいことである。国の政策を見ていると、デジタル教科書など、本当に役に立つのか分からないものに囚われている印象を受けるが、秋田県としては、国の政策に振り回されることなく、生徒たちの主体的な学びを支える ICT 活用を、現場の教員をしっかりとサポートしながら、力強く推進していただければよいと思う。

8 閉 会

(以上)